

## とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-1162
園名	ChaCha Children Soshigayakoen

### 1. 活動のテーマ

<テーマ>

Empathy、クリエイティビティ、デジタルの活用、自然とのかかわり

<テーマの設定理由>

当園は、自然公園に囲まれた環境の中での身体的・直接的な体験とともに、デジタルデバイスの活用などによる、多様な表現や想像、創造性の育ちを大切にしている。また、このことは園のコンセプト「自然公園×クリエイティブ教育」として掲げ、保護者や保育者など、園内外に広く伝えながら、運営をしている。

### 2. 活動スケジュール

4月	・「カタチ研究所」というコーナーを構成し、カタチを基に様々な表現活動を行う。(保護者の方、専門家のダンサーの方とのカタチダンスWSを行うなど)
5月	・園での出来事から“わすれること”“おぼえていること”について対話を重ね、「“トクベツ”なことは忘れない(おぼえている)”という言葉から、“トクベツ”という言葉が子どもたちの中での合言葉のようになっていく。
6月—7月	・園行事ちゃちゃマルシェにて、“忘れない”ための商品として、メモ帳(づくり)の探究・準備を行う。(下部の記録①参照)
8月—9月	・“トクベツ”をテーマに、日頃は行っていないトクベツなこと(外部の方に教わった染め物の経験を活かした特別な服をお揃いで着る・花火・みんなで夕食など)を子どもたちが企画、準備しておこなう園行事を行う。
10月-12月	・【く“みたて”るコーナー】を構成し、人形遊びや見立て遊びが盛んになる。(下部の記録②参照)
1月	・人形遊びを発展させた【人形劇づくりコーナー】を構成し、物語づくりがすすむ(下部の記録③参照)
2月 - 3月	・卒園式に向かうにあたりの際に、“トクベツなみんなのちゃちゃ”というテーマを子どもたちが掲げながら、“見えるけど見えない思い出の絵”を描く(下部の記録④参照)

### 3. 探究活動の実践

#### <活動の内容>

- ・活動のために準備した素材や道具、環境の設定
- ・活動中の子供の姿・声、子供同士や教諭との関わり 等を記載ください。

#### 〔環境構成〕

- ①たくさんのメモ帳やメモ帳づくりの素材(針金、プラスチックシート、人工皮革)の準備
- ②小さい人型フィギュア、ボタン、100均でそろえた様々な素材、廃材などを用意したコーナー等
- ③動画撮影用カメラ、ディスプレイ、SDカード、HDMIケーブル等、絵本
- ④透明テーブルクロス、アクリル絵の具、油性ペン、ハトメパンチ等

#### 〔活動中の子どもの言葉〕

- ・子どもの声や姿は下部の記録内及び振り返り欄にて記載する。

#### 〔保育者との関わり意識〕

- ・園内にとどまらず、様々な地域資源の活用。
- ・対話を中心にすえながらも、そこで得た子どもの言葉やイメージをもとに、保育室内の環境を整える中での子どもの主体的な活動の重視。

#### ①メモ帳の探究

「100円ショップに、メモ帳があった！」と、100円ショップに向かいました。

祖師谷公園を飛び出して、散歩に行く道中も不思議な感覚のような表情を浮かべる子どもたち。いつも以上に交通ルールやマナーを意識して、歩いていました。

「しいー！静かにだよ」と周りへの配慮しながら、広い店内でのメモ帳を探しますが、キャラクターなどが書いてあるメモ帳をイメージして探していたからか、なかなか見つかりません。

「あれ？これじゃない？」  
「あーこれか！うちにあるのと違うからわからなかった。」  
「いっぱいあるね！」  
「たくさんの種類のメモ帳が100円ショップにはあることを知ります。」



#### 【メモ帳調べ～100円ショップチーム～】

「このメモ帳は、ココが丸いの(リング)がついてる」  
「かわいいー！このメモ帳は、ココ(表紙の柄)がかわいい。これがいい！」  
「ダイヤモンドがついてるから、お客さん喜びそう」  
「これは大人っぽいメモ帳だな。」  
「新幹線のカタチもある！これがいい！」  
「でも、お客さんは大人もいるんだよ？」  
「そっか・・・」  
と、自分が気になるメモ帳を調べつつも、時折、お客さんの気持ちになって、メモ帳を選びます。

「みて！これは線じゃなくて、シカクがいっぱいある！」と方眼紙のメモ帳を見つけたリ、  
「これは大きい(長い)から、たくさん書いて、おしゃくさん喜んでいいかな」と見た目だけでなく、機能的な面やカタチにも注目していました。



#### ② く“みたて”るコーナー



#### 【く“みたて”るコーナー】



年長となり、これまでの経験から、様々な知識を得ている子どもたち。その一方、柔軟な発想やひらめき、想像力をかきたてるような環境を整えていく際に、子どもたちが常日頃遊んでいる人形遊びに着目しました。

使い方が定まっていない素材として、形が特徴的な素材、透明度の高い素材、自然素材、廃材など多様な素材を用意しました。

「キラキラしているブルつくった」「えいがかんつくれた」「遊園地ができた」など

ミニチュア用フィギュアを組み合わせることで、自分の経験に関連する様々な“見立て”の世界が広がりました。

### ③人形劇づくりコーナー



#### 【人形劇づくり ×デジタル】

子どもたちが常日頃遊んでいる人形遊び。既成の人形だけでなく、画用紙などで作り、手で動かして遊んでいる様子から、その遊びの世界観を広げる環境として、撮影用のカメラとディスプレイを用意しました。

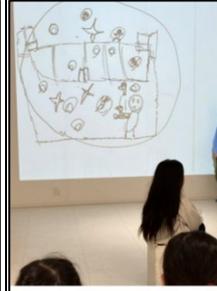
「いまの声はちいさかったな」「ちょっとふざけすぎた」

「あーちょっと恥ずかしい」などの気持ちや

「もう一回撮ろう！」「ちょっとごはんが足りないから、つくってくる！」など次につながる気づきなど

自分の演じている人形遊びを客観的に観ることで、物語や遊びが広がっていききました。

### ④見えるけど見えない思い出の絵



#### 【“みえるけど、みえない、思い出”の ありがとうの絵】

すだちのとき(卒園式)に向けて、式で何がしたいか、年長児の自分たちで、式のテーマを考えました。

その中で、「ちゃちゃって、テーマに入りたい。」という声が上がります。

その想いを絵に描いていくと「キラキラしたり、まるい感じの思い出が、目に見えないけど、(自分の)まわりにたくさんある」ということを絵で友だちに伝え合い、「とくべつで、みんながあつまる、ちゃちゃ」の思い出の絵を描くことになりました。

さらに「みんなとおおきくなったから、いろいろなみんなにありがとう」を伝えたい。という子どもたちの想いも生まれ、見えるけど見えない透明なシートに思い出の絵を描き、みんなに見えるところに掲示しました。

## 4. 振り返りく振り返りによって得た先生の気づき

①日常の出来事から、対話が広がった“覚えていること”“忘れていること”という話題だったが、特に「特別なことはわすれない」という、子どもたちの気持ちや想いは、大人と同じような感覚であることが、再認識できた言葉だった。その後、忘れないということから“メモ帳”という文化的な道具への関心につながったことも驚きだったが、「おかあさんはスマホでメモしてる」「おねえちゃんはメモ帳で勉強している」「メモ帳は、忘れないように書いておいて覚えるためにつかうもの」「メモ帳は、言われたことを書くためにつかうもの」など子どもたちなりに道具について理解していることを語る言葉にも、改めて道具の意味が多様であることに気づく。メモ帳づくりでは、表紙が皮素材のメモ帳、表紙がプラスチック素材のメモ帳、長方形のメモ帳、正方形のメモ帳、カレンダーつきメモ帳(スケジュール帳)など様々なメモ帳を近隣のお店で見つけることができ、メモ帳と言っても多様であることに気づかされた。また100均には様々な素材があり、それらを活用しながら、子どもたちとメモ帳をつくることができ、子どものニーズやイメージを実現することができた。

②年長児になり経験も増えている中で固定化した知識やイメージを持ち始める時期であったが、カタチへの関心やメモ帳づくりでの様々な素材に目をむけていること、また日常的に人形作りをして遊ぶ様子から、レジヨ・エミリアアプローチやミニチュア作家の田中達也氏の作品らからインスピレーションもらい、見立て遊びができる様々な素材を用意したコーナーをつくった。年長児ならではの素材の見方や活かし方、また見立ての種類が多様さが表現されるコーナーとなった。

③②に関連し、人形遊びをさらに客観的に捉えながら、自らの表現や言葉に気づいてもらえる機会として、カメラやディスプレイを活用した人形劇コーナーを設けた。さらに、自分の言葉や物語り表現の幅を広げるために絵本も充実させていくようにした。主に日常の出来事を基にした人形劇作品ができあがっていったが、中には足りないモノや言葉を付け足して、劇の改善を行う様子もあったが基本的に一過性の“遊び”としてのコーナーであり、物語りを深めることや、演出にこだわるといったよりも、あくまでも即興的な表現や展開を楽しむ姿が多いことに気づいた。

④卒園式のテーマを子どもたち中心で考えてもらおうと、保育園生活 6 年間での様々な人々との交流や気づきが、“みんな”という言葉に込められつつ、年長児なり取り組んだ“トクベツ”という言葉への想いも加わり、そして、思い出がある“ちゃちゃ”といった園の存在や園での生活の大切さに関して、子どもたちが感じている気持ちや価値観が表れていく描画作品及びプロセスとなっていた。このことは、こども家庭庁が掲げる“こどもまんなか社会”を意識した活動やつながりが、子どもたちの言葉や声から表れているような感覚も抱き、子どもたちの生活や対話を大切にする保育を今後も継続していきたい。